

間接伝達論的論理学

第2部・注釈部(その4)

清水 茂雄

Die mittelbare-mitteilungstheoretische Logik

Zweiter Teil・Anmerkungen <4>

Shigeo SHIMIZU

Zusammenfassung : In dieser Abhandlung möchte ich meinem Buch mit dem Titel "die Mittlbare-mitteilungstheoretische Logik" Anmerkungen geben. Ich habe schon solchen Versuch in drei Abhandlungen gemacht. Hauptsächlich habe ich in den drei Abhandlungen den Begriff der Wahrung der Szene erklärt. Indem die Szene wirklich gewahrt ist, kann die mittelbare-mitteilungstheoretische Logik erst ihres Spiel beginnen. Ohne die Wahrung der Szene kann man sich das logische Spiel nicht ansehen.

Auf der Grunglage der Wahrung der Szene beginnen wir die mittelbare-mitteilungstheoretische Logik zu entfalten. Diese Abhandlung ist der erste Versuch der Entfaltung.

Key words : die mittelbare-mitteilungstheoretische Logik (間接伝達論的論理学), Ereignis (エアアイクニス), Heidegger (ハイデガー), der letzte Gott (最後の神)

はじめに

この論文は『間接伝達論的論理学』の第二部、注釈部となるはずの一連の論考の第4報である。「第一部」は1996年に単行本として公刊されたが、その第一部への注釈部が「第二部」である。「第一部」は「高々たる山頂に立ち、深々たる海底を行く」(道元『正法眼蔵・有時』参照)者の見た眺めが書かれているために、ただそこに到った者だけが理解できるようになっている。しかし、第二部の注釈部はニーチェ的に「山頂から山頂」に飛ぶのではなく、山頂から降りてきて、そこへの登山道をつけることが意図されている。それはなにか筆者が聖者のように俗界におりて

きて、「教え」を説くといったようなことと受け取られるかもしれないが、ここで筆者が「登山道をつける」と言っていることはそのようなことではない。筆者はただ、或る信じがたいことを言おうとしているだけであり、この「信じがたいこと」が信じがたい故に「道をつける」ことが必要になったのである。その「信じがたいこと」というのは或る意味ではすでにスピノザの哲学が先駆けしていたことと言えるかも知れない。「第一部」でもすでにスピノザへの注目を示しておいたのであるが、それを簡単に言えば、「定義の中に有が含まれる」ということになろう。定義がされるとそこに必然的に「有る」ということが言えるようになる、これがつまり、「信じ

がたいこと」なのである。そして、このような「信じがたいこと」が起きているところ、そこが「山頂」であり同時に「深海底」であるのだが、このことに向けて登山道を開こうとしているのである。といっても、筆者はこれからスピノザの哲学を研究しようというのではない。スピノザがまだ夢にも思わなかった「信じがたいこと」に道をつけようとしているのである。筆者はこういうことを口から出まかせに言っているのでもなければ、大法螺を吹いているのでもなく、静かに慎重に事柄に即して述べているのである。すべての思惟がまだそこには到達していない、或る「信じがたいこと」それを筆者は言わなければならない。筆者の山頂にはスピノザの山頂が「見えている」にすぎない。それは決して同一の山頂ではないが、そこへは飛び移ることができるのである。

或ることが定義されるとそこに必然的に「有る」ということも言われなければならない、存在の秘奥の出来事がここに示されている。このようなことが目撃されるにはこのようなことが自らつけた「小径」を見つけ、この小径をたどらなければならない。それは「論理学の歴史」としてすでに哲学史に現れた。筆者はこれまでの注釈でその連関を「金曜日」、「土曜日」という比喩的な表現で言い表し、それがどのようなことかも簡単に説明した。「金曜日」とはヘーゲルの「論理学」を意味し、「土曜日」とはハイデガーの哲学の境位、すなわち、Ereignisを意味するのであった。そして、『間接伝達論的論理学』は「日曜日」に相当するということも述べた。しかし、これらは皆、かの「信じがたいこと」への、そして、そこからの「小径」であり、我々はまずこの「小径」に立たなければならない。それが「場面の確保」ということであり、これについては「注釈部・その3」で詳述しておいた。このような「場面の確保」がなされていることを前提にして、今や筆者は

この「第四報」から「本論」への注釈に進んで行きたい。

「場面の確保」ということは以上に述べたように本質的に「山頂」(＝深海)への、そして「山頂」からの「小径」をたどるという意味をもっている。「序論」ではこの「小径」を見つけなければ決して『間接伝達論的論理学』の言わんとしている「信じがたいこと」に達せられないということを説いたのであるから、「本論」では実地にこの「小径」をたどるということになる。「本論」への「注釈」はこのような「小径」へのそま道を通し、あるいはこの「小径」を歩きやすくするという仕事することになる。このような、思考にとって「険しい径」を何の苦もなくすたと登れる健脚にはこの「注釈」は必要がない。しかし、まだかならずしも「場面の確保」の出来ていない人やまた、かの「険しい径」に難儀を感じる人にはこのような「注釈」が役立つであろう。それもこれもすべてあの「定義から有るが出てくる」という処に属することなのである。

「場面の確保」ということがどれほど困難なことか、そしてどれほど重要なことかを述べるのにおそらく場合によっては十数年もかかるであろう。というのも、それは「論理学」の境位であって、「意識」される事柄の世界には属さないからである。そして、「意識」の世界から「論理学」の境位に登ってくるのに、人がヘーゲルの『精神現象学』という登山道を歩んだとしても、それですでに数年の年月がかかるであろうし、更にその上にハイデガーの後期哲学の道に進んで、「奥の細道」というこれまた「論理学」の境位に歩み入るのに数年、十数年、かかると思えば、そのさらに奥の頂上に到るのに一体、どれほどの年月を要することになるだろう。しかし、頂上への道はこの小径以外にはないのは明白なのであるから、筆者としてはそこへの道を拓き、そして、それをできるだけ見つけやす

くし、また、登りやすくしておくことが「為すべき唯一の」仕事になる。それ故、この「注釈部」は筆者には生涯を費やさなければできないような仕事になるであろう。

ニーチェが言うように、「最も偉大な思想は最も偉大な出来事」である。しかし、最も偉大な思想というのは「その定義の中に必然的に有るということを含む」ということを言うところのものである。スピノザはこのことをその哲学体系の要としたことで最も偉大な思想をもたらしたのである。『間接伝達論的論理学』もまたこのことを最終的に言うことになるが、それは断じてスピノザの哲学となるのではなく、むしろ、ハイデガーの後期哲学につながるのである。それは、「定義の中に有るということを含む」ということが哲学の歴史を形成していて、それがそのものとして言われるには、哲学史がその終わりにならなければ決して現実のものにならなかったからである。その意味ではスピノザの体系にはなにか辻褄の合わぬものが潜んでいるということが言えよう。すなわち、「定義の中に必然的に有るということを含む」という思想はあらゆる思想の開始というよりはその終わりに至ってはじめて始まりになるということなのである。カントが概念と実在はどこまでも同一にならないと主張したのは正しかったと言えよう。しかし、それにもかかわらず、やはり、すべての思想、そして、すべてのものの根底にあるのは「定義の中に有るを含む」ということなのである。キルケゴールが指摘したように、この思想は「まことに深遠な」思想と言える。

「本論」への注釈の意味を明らかにしたので、次に、「本論」がどのように展開されるかをここで簡単に説明しておきたい。

「序論」のかなめは「場面の確保」を説くにあった。場面を確保することで、上で述べたような「山頂」への小径をたどることが可能になるのであった。しかし、この「小径」

は「山頂」への道であるだけでなく、同時に「山頂」からの道でもある。前者の規定の「道」はこれから山頂へ向かうのだから、まだ山頂は知られていないという性格をもっているのに対して、後者の規定の「道」はそれが山頂への道であったのだと眺められている。このような連関を「本論」は実地に遂行するのである。最初にまず山頂への道から山頂に立つということを遂行する。それは、ハイデガーの晩年の思惟内容である、「言葉への途上」という事柄をたどって、「真言」に達する道程である。次に、山頂からの道をつける。それは、今、こうして立っているその山頂にそれをたどってきたその小径を山頂から眺め、それが山頂への小径であったことを開示するのである。具体的にはそれは「間接伝達論的論理学」からハイデガーの「論理学」の何であったかを照らし出すという作業である。次に、同様にして、「間接伝達論的論理学」の境位からヘーゲルの「論理学」の何であったかを照明する。これによって哲学の歴史が「始めに言葉があった」ということと内的な関係にあることが明かされる。そして、このような連関が開示された後で、先に述べたあの思想、すなわち、「定義の中に必然的に有るが含まれる」ということの真相が明かされるのである。ここに至って、人はこの思想のまことに不可思議な真実の姿をまのあたりにするであろう。そして、それが最終的に知らなければならないことがあったことであり、すべてがこの思想に向かい、すべてがこの思想から発していたことを理解するであろう。仏教が教えているように、人々に善きものを布施するとき何が最も善きものかというに、それは真理を布施することである。しかし、何が真理か。それはつまり、この「山頂の思想」以外にはないのである。この陰しくも高い山にアタックするものに幸あれ、「すべての山の頂には静けさがある。」(ゲーテ)

「本論」は「山頂の思想」への小径を実地

にたどるということを行うのであるが、ここでは同時にそこでしか見られないような景観と高山植物の神仙な有様を開示することになる。そのようなもののひとつが「命名の現場」ということである。特にそこでは最も神秘的な姿の高山植物とも言える「必然」の命名の様子を伝達することになる。しかし、単に「必然性」の命名の現場の有様が目撃されるだけではなく、むしろ、そもそも、「命名」そのもののまことに「信じがたい」光景が明かされることになるであろう。旧約聖書の「創世記」1、に「そのとき、神が『光よ、あれ。』とおおせられた。すると光ができた。」と言われているように、ある「命名」が原初には起きているのである。この原初的な現場をここ、「山頂」への道行きが通過することになる。そして、このような景観の目撃とともに、人は「間接伝達」の精髓たる unrealization に契合することになるのである。

さて、「本論」への注釈の形式はこれまでのものを踏襲することにする。すなわち、最初の番号は「注釈部・その1」からの通し番号、続くかっこ内には既刊の『間接伝達論的論理学』・第1部のページと行が記されていて、注釈箇所が指定される。その下のイタリック体の記述が注釈される文なり語句である。単なる引用文献の指示参照の記述の場合にはこの紀要の「執筆要項」の指示に従うことにする。

このような論文が学術論文に属するのかわかということに疑問を持つ人は「その2」を参照してほしい。しかし、およそすべての思惟は、そして、思考の営みは「定義の中に有るを含む」ということに基づくのである。本論文はそこへの道であり、或る意味では最高度に「学術的」なのである。

27, (p.20, 7行)

「ここではスピノザの哲学の可能性が見て取られる空間が開かれている」

ドイツ観念論にとってスピノザの哲学は無関心でいられぬ事柄である。シェリングの思想の深化に彼の思惟の影響が認められるということ、あるいはヘーゲルの『論理学』の中にスピノザへの並々ならぬ関心が示されていることから窺えよう。スピノザの哲学で最も理解しがたい事は、その体系が「定義から始まっている」ということである。これがヘーゲルには受け入れがたい事であったのである。「絶対者は最初のもの、直接的なものであるのではなく、絶対的なものは本質的にその結果である。」(Wissenschaft der Logik, Gesammelte Werke 11, S.376) と言うとき、ヘーゲルはある意味ではスピノザの哲学の深度をまだ測りかねていることを表明している。定義から学問の体系が始まるということに何の不思議さも感じない人はヘーゲルがここで述べていることの意義をよく理解できないであろう。というのも、高等教育を受けた人間なら、だれでも、まず、定義があってそれからいろいろな真理が導かれるということを学んでいるからである。特に数学はそのような形式を尊重していることは周知の通りである。しかし、哲学ではこのような方法論がただちに疑問視されるのである。たとえば、「直線とは二点間の距離の最短のものである」といった定義をなんの疑問もなく受け入れられる精神はこの定義から始めることができる。しかし、ヒュームも示唆しているように、この定義の中では「直線」の定義がされていないためにこの定義そのものが根拠づけられなければならないとなっているのである。むしろ「直線」の定義から上記の定義は論証されなければならないのである。こうなると、我々は直線だけでなく、およそ点とか線とかが何であるかが定義されなくてはならないことに気づかされる。すると次にはよりいっそう根源的なもの、たとえば、連続や空間そして量とかを定義しなければならなくなり、等々、より先立っているものの定義が必要となるのであ

る（このようなことについてはヘーゲルの『エンツュクロペディー』の254と256を参照）。ヘーゲルはこのような最も先立っているものの定義は実は結果として起こってくるということを明かすのであり、このこととスピノザの行き方は異なるのである。しかし、スピノザの体系が定義を開始としているということは或る深遠な事態を教えているのであり、そのことはこの『間接伝達論的論理学』の第一部の最後になって明らかにされる。この「最後になって」ということは単に或る著作の終端にということの意味せず、むしろ、歴史の終わりにということの意味する。というのも、『間接伝達論的論理学』はハイデガーの哲学の境位（奥の細道）の更なる奥で生起していることがらを伝達するのであり、「最後」となっているからである。もはやこれ以上の奥はあり得ない。なぜなら、そこで「定義から有ということが言われる」ようになっていて、スピノザ的に言えば自己原因となっているからである。しかし、我々はこの事態を「自己原因」とは名付けるわけにいかないということを知っている。なぜなら、ここでヘーゲルが主張するように、確かに、「始まり」が「終わりに」現れるからである。そして、「始めに言葉があった」のであり、ここでは「自己原因」という命名力の欠陥が眺められるからなのである。しかし、それにもかかわらず、「始まり」は「定義」から、しかも、その定義において有ということをも必然的に生じさせるような「定義」から始まっていたのである。ここではじめて人はスピノザの哲学の持っている奥の深さというものを理解することになるであろう。彼の哲学が「定義から始めた」ということには余りにも深遠な内容が潜在しているのである。ほとんどこれまで誰も、あのヘーゲルですらその深度を測りかねていたそのようなことがらをこれから開陳していくことが「本論」でなされるであろう。

スピノザは『エチカ』第一部定理8の備考2で「事物について混乱した判断をくだし、事物をその第一原因から認識する習慣のないすべての人々にとって定理7の証明を理解することは疑いもなく困難であろう」と述べている。定理7は「実体の本性には有ることが属する」というものであり、スピノザはこれを実体と自己原因の定義から証明している。「混乱した判断」というのは「実体の様態的変状と実体自身の区別が出来ていない」ということである。しかし、このような区別は単に知性の能力の優劣の問題なのではなく、区別そのものの起源に関する問題なのである。その区別が「実体と様態」の区別であることをスピノザは洞察していてそれだけでも彼の思索の深さと鋭さに驚かされるのであるが、同時に彼はこの区別の可能性の根拠にまで足をのばすことができかねているのである。これが彼の思惟の限界である。我々は、しかし、最後のところまで、いってみれば人跡未踏のところまで行き尽くすのであり、スピノザ哲学の「可能性」といったものを「見て取れる」空間を開き出すことになる。

ところで、スピノザが言うように人間は普通は「混乱した判断」を為していて、言い換えれば、「実体と様態の区別」が出来ていない。そんなことはどうでもよく、キャベツと白菜の区別ができればそれでよいではないか、と言う人は実はかの「区別」が出来ていないということからそのような発言をしているのである。すなわち、その人がかの区別を知らないということはその人の問題性なのであり、彼の全存在の抱えている「根本問題」なのである。もっというなら彼が真に幸福になるには彼は「実体と様態の区別」がつくような「神の知的愛」に到らなければならないということである。周知のようにこれが『エチカ』の結論である。キャベツと白菜の区別ができるだけでは人間は不幸の最中（生存の本質は苦である）にあると言える。冷たく厳しく容

赦しないスピノザの哲学の中にはこのような真に深い人間への愛情のまなざしが注がれているのである。

さて、以上のように、スピノザの哲学が定義から始まっているということは怖ろしく深遠な事柄なのであるが、ヘーゲルの指摘するように、それが「終わり」ないしは結果として言われるようになっていなくてはならない。最も問題になるのはこのようなことがどうして「可能になっているのか」ということである。この問いはおそらく哲学的な問いの中でも最も深く、高い問いであり、問いの中の問い、その山頂ともいえるものである。このような可能性は言葉としての言葉の言うことの本性である間接伝達するということにあるのである。unrealizationを実現しているこの間接伝達に於いて、「定義から始まる」ということが、同時に「ある中間(Mittel: 手段)を介すること」になる(最後に顕れる)ということでもあることが言葉することになっているからである。間接(mittelbar: 手段を取り得る)伝達(mitteilen: 分かち合い)する真言(後出する)こそが上記の問いの答えを自らの中に蔵しているのである。そこで、ここからある驚くべきことが帰結してくる。それは、つまり、このような間接伝達している原初的な場面の直前、いいかえれば、ハイデガー哲学の歩み入った境位、Ereignis、に於いては始まりと終わりが一緒に会する当の現場のrealizationが起きているということになる。そして、実にハイデガーが示しているEreignisとはそのような事態なのである。筆者はこれ以上この稲妻をたたえた重たい真理の雷雲の怖ろしさに耐えられそうにないので、次に移りたい。雷に打たれたと思う人は是非、ハイデガーの未公開著述を精読した後、ここの注を再度丁寧に読まれるのがよいであろう。

28, (p.20, 9行)

「Da-seinという言葉がまだ『反転』していないからである」

ハイデガーがKehreということは何を見ているかということとKehreそのものの可能性への問いを一応分けて考えるべきである。我々は前者をKehreの事態と呼び、後者をKehreの可能性と呼ぶことにしよう。ここで我々が「反転」と言っていることは後者の「Kehreの可能性」から捉えられた一種の方向性の逆転を意味するのである。ドイツ語でKehre(ケーレ)という語は動詞のkehrenに由来する名詞であり、「道路の急カーブ、体操の上向き飛び越し、上向き半回転」などを意味する。英語の相当する単語はturnである。日本語で「かえる」という言葉にいろいろな意味を含ませているように、ハイデガーもおそらくはこの「かえる」といったような意味の含蓄をKehreに託しているように思える。つまり、「かえる」とは「反る」であり、「還る」であり、「帰る」でもある。ハイデガーの哲学の境位というものを我々は「土曜日」であり、「奥の細道」であると述べたのはそれが「間接伝達論的論理学」とのいわば位置関係を明らかにするためであった。しかし、ハイデガー自身はこうした位置関係を「まだ知らない」のであるから、彼の思索空間自身の眺めというものが「その場面の内部で」見えてこなければならない。その最も特徴的な眺めがここで言うKehreなのである。それはハイデガーの「論理学」の営まれている「場面」の本質を見事に表現している事態、「Kehreの事態」なのである。この事態は「反る」と「還る」と「帰る」という意味を含んでいる。

まず、「反る」と言われるのは、すでにスピノザとの連関で述べたように、ハイデガーの哲学は「間接伝達論的論理学」ととしての「土曜日」であるために、「始まりの方から」すべてのものが知られるようになっているというそのことが「知られるようになる」から

である。このような二重の「知ること」が必然的に彼の哲学の境位では目撃されるようになっていのである。しかも、そのような「二重の知ること」はただハイデガーの境位でしか頭にはならないのである。先の注で述べたように、「定義から始まる」というそのことは実は歴史的な「終わり」になってようやく可能になるのであるが、そのちょうど一歩手前に位置するここ Ereignis の場面でも「始まりのその定義に相当する」出来事が起きているのである。それは「終わりころになって」始まりの方から日が昇ること、つまり、「反る」ことなのである。「定義から始まる」には「終わりころ」にならなければ可能ではないということである。人は普通は混乱した判断をしているのであるが、ハイデガーの境位に至ってはじめてかの「実体と様態の区別」がつくようになるということになろう。なぜなら、ここではじめて、「有るものと有るとの差異」が問われるようになるからである。

次に、「還る」という意味での Kehre について理解を深めよう。「還る」というのは「一巡りする」という原義をもち、輪を形成することである。ハイデガーは Ereignis の本質にこのような一種の輪が形成されていることを Kehre という語で示しているのである。このような意味での Kehre はたとえば、次のように言われている。

「Ereignis はその最も内奥の生起とその最も広範な影響力を Kehre の中に持っている。Ereignis の中で起こっているこの Kehre はあらゆる他の、後に列する、その由来に於いては暗く、問われないままになっている、よくそれ自体『最後のもの』と受け取られる諸々の Kehre と循環と輪の隠された根底である。」(Beiträge zur Philosophie, S.407)

ここでは Ereignis の中に認められる Kehre がいわゆる論証上の循環や哲学体系に本質的に含まれる根拠関係の輪といったものの根拠になっていることが主張されている。いいか

えれば、ハイデガーは Kehre を「還」ないしは「環」としての意味を持つものとして考えているのである。それではそのような「根底としての Kehre」とはどのようなことか。

「このような Ereignis の中での根源的な Kehre とは何か。ただ Da の起こることとして Seyn の突然の顕れのみが Da-sein を彼自身にもたらし、そして、そのようにして切願的に定礎された真理を、Da の明け透けられた隠すことの中でその場所を見つけるところの有るものへと遂行すること(匿うこと)へともたらしするのである。」(Beiträge zur Philosophie, S.407)

この叙述の中に「根源的な Kehre」の事態が表現されているのである。というのも、Seyn の「突然の顕れ」(Anfall: 発作)は Da を出現させ、それによって人間本質である Da-sein をその固有の自己自身へともたらしからである。ではそれがなぜ「輪」と関係するのだろうか。それはこのような Seyn と Da-sein との間に根拠関係の輪が形成されるからである。すなわち、前者が前者として「起こる」には後者を定礎者として招かなければならないが、同時に後者はただ前者にとって必要とされたものとして前者を根拠にしているという相互の依存関係が成立するからである。有と人間本質との根源的な関係はこのような Kehre の事態となっていて、しかも、それは諸々の循環のひとつではけっしてなく、むしろ、それらの「根底」になっているのである。主と従とがお互いに入れ替わり得るこのような連関がハイデガーの哲学の境位(Ereignis)ではじめて眺められているのである。

この「還る」という意味での Kehre は本質的な「Kehre の事態」と言えるが、それが「Kehre の可能性」との連関を持つようになるとハイデガーは kehrig (訳しにくいが敢えて言えば「転的」となろう)という言葉を使う。たとえば次のような事柄を開陳する時に、「かの(人間の)Seyn への帰属性とこの(最後

の神の) Seynを必要とすることが初めて自らを隠すことの中に有ること (Seyn) を kehrig な中間 (Mitte) として開披する。この中間において、帰属性はかの必要を踏み越え行き、必要が帰属性を越えて聳える。それはつまり、Er-eignisとしてのSeynであり、これは自分自身のこのような kehrig な節度を越えることから起こり、—そのようにして、人間と神との闘争の根元となり、(最後の) 神の立ち寄り—と人間の歴史との闘争の根元となっている」(Beiträge zur Philosophie, S.413)

この引用の中には「Kehreの可能性」といったことが問われ得る明るみがすでに現れている。なぜなら、彼はここで「kehrig な中間」と言っていて、Ereignisが或る中間的な位置規定がなされるものであることを表明しているからである。この「中間」という位置規定こそが「Kehreの可能性」を考えることの「出来る」ということに光を与えることなのである。最後の神の立ち寄りの場面としてのこのEreignisの領域には固有に kehrig と呼ばれる事態が「起きている」のである。では「どうして?」か。それは「間接伝達論的論理学」しか答えられないのである。いいかえれば、ハイデガーの境位は「土曜日」の時を経験している「論理学」のために、そこには「最後の循環」が「起きている」のであり、この循環に巻き込まれていることの可能性の根拠は次の日、すなわち「日曜日」が明けなければ決して明らかにならないからである。なお、このような「Kehreの可能性」は実は「定義の中に有るを含む」というあのスピノザ哲学の根本命題に関係していると言っておきたい。

さて、次に第三の意味でのKehre、すなわち、「帰る」の意味でのそれを考えてみたい。ハイデガーがこの意味でKehreを思惟するとき彼はそれを「有の歴史」との連関性において考えている。彼によればヨーロッパの歴史の根底にある事柄は「形而上学」であり、そ

の本質的な事態は「有の忘却」である。この「忘却」は人間がなにか能力の欠如によって忘れていているということではなく、「有の」忘却であり、「有」そのものにいわば構造的に組み込まれているところの「接合構造」である。しかし、このような「有の」忘却が可能であるのは「有」が自分自身を隠す故であり、このこと自身がいずれは明らかにされる。このようにして「有の忘却」から「有の顕現」が起こることをハイデガーはKehreと名づけているのである。典型的な説明を次に示しておく。

「しかし、おそらく、このようなKehreが、すなわち、有の忘却がSeynの起こることの守りへと帰ることはただ、そのKehreの隠されている本質の中で転的な危険がはじめて現に有るところの危険として起こるときである。」(Gesamtausgabe, Bd.79, S.71)

以上、ハイデガーがKehreという語でどのようなことを思惟しているかを簡単に説明したので、次に我々は「反転」ということの理解を深めよう。

この注の冒頭で触れておいたように、我々が「反転」と名づけている事柄は「Kehreの可能性」に関係するところの事柄であって「Kehreの事態」とは直接の関係はない。では一体、これまで解説したようなハイデガーの哲学に必然的に現れるKehreの事態の「可能性」とは何か。それはもうけっしてKehreの事態とはなっていないのだろうか。それともまだ?

この問いに答えるにはどうしても「場面の確保」が必要なのである。それはつまり、このような問いに答えるということは、もはやたとえば数学の難問に答えるとか、自然界の謎に答えを見つけるとかのある意味では非哲学的な、幼稚で単純な「問いと答え」の関係の中に安らいでいる知の営みとは全く異なるような「問いの領域」の固有性が問いに値するものとして知性に見えてこなければならな

いからである。しかし、これが普通の知性の活動しか知らない知性にとっては難関になってしまうのである。すべての思惟の営みの根底に深く隠されているKehreの事態を、思惟する知性が自分で見出すこと、これがそもそも普通の知性ではなく、哲学的な知の営みなのであるが、その上なおこのことの可能性を探る知性とは一体どのようなことになっているのだろう。それはまったく尋常な知性ではなく、「異常な知性」でなければならない。しかし、そのような知は精神異常などとは正反対の「冴えに冴えた知性」でなければならないのである。ではなぜ「異常」なのか。それはつまり、このようなKehreの可能性にまで照明をもってつき進んでいく知性はそのものの自身が「反転」になっていることを知ってしまうからなのである。すなわち、ここで知性はもはや「私を知る」という構造を取ってはいないで、むしろ、或る「反転」になっていること、つまり、「知るが知る」とでも言えるようなまったく「異常な」ことになってしまうのである。かつて、あのアリストテレスが述べたような「思惟する思惟」といったような事柄をそのような「冴えに冴えた知性」が自分で経験するようになるのである。そして、このことがスピノザの哲学とも関係するわけである。

しかし、「冴えに冴えた知性」がKehreの事態の中でその「可能性」に向けて問うとき、そのもの自身の「反転」に会うということはまだけっして「反転」の真相に至ったのではない。では「反転」の真相はどのようなことか。それは「言葉」の起源に関係するとしか今は言えない。「反転」の真相を言葉にできるのは「言葉としての言葉」、いいかえれば、言葉がはじめて言葉としてその始まりの様子を伝えることになった時なのである。「反転」の真相はun-realizationが実現する「場面」で言い伝えられているからである。かつて、道元禪師が「法華が法華を転じてい

る」と述べたとき、それは我々の「間接伝達論的論理学」とは別の道に立つものの、ある種の類似的なことが見えていたのではないかと思われるのである。「反転」は思惟する主体が「反転する」という全く「異常な」事柄なのであり、「凡情を脱している」ことに属している。

「Kehreの可能性」と「Kehreの事態」とがその最後の問いの形となったとき、そこにハイデガーの哲学が起きているのである。それはある最も謎めいた「渦」がそこで初めて起きているというような事態なのである。哲学そのものが巻き込まれているこの「渦」を目撃する人は「有るということ」に秘められている不可思議さに胸打たれるであろう。

29, (p.21, 2~3行)

「それは彼の言葉で*der letzte Gott*, 最後の神と呼ばれる」

ハイデガーがなぜまた「最後の神」と呼ばれることを思惟しなければならなかったかについては辻村公一氏の著書所収の透徹した論文、『最後の神』を参照されたい。その論文の中で辻村氏は「『最後の神』は『別の思索』を喚起するとともに、『別の思索』はその最後に於いて『最後の神』を立てざるを得なかった。そこには『別の思索』と『最後の神』との間に深い循環が存する。」(辻村公一：ハイデガーの思索，創文社，1991，p.202)と述べている。ここで先の注で述べたようなKehreが問われることになっている。辻村氏は最後の神と呼ばれる事態の根底に「深い循環」があるというまことに透徹した洞察をしているのであるが、実はこの表現は必ずしも的確ではないのである。最も事態に即した表現は「最後の循環」が存する、となるべきなのである。いいかえれば、「最後の循環」と「最後の神」とは同一の事柄になっているということである。ところで、その哲学体系の基礎となるものに論証上の「循環」があるという

ことはその哲学の欠陥ないしはその哲学が成立しないということでは全くない。むしろ逆に哲学というのは循環の「渦」の中に巻き込まれ、かつ「渦」を起こすものなのである。しかし、ハイデガーの哲学、特にEreignisの境位、はこのような「渦」がどうして起こるのかという可能性に光を当てつつあるものであり、それ故にそれは「最後の循環」になっているのである。ここではじめて、「最後の神」が現れるのである。

最後の神とハイデガー哲学の核であるEreignisとの関係、そして、我々の「間接伝達論的論理学」との連関を示唆する次の発言は注目値する。

「拒絶(Verweigerung)は贈り(Schenkungen)の最高の爵位であり、隠れることの根本特徴であり、この隠れることがSeynの真理の根源的本質を成している。ただそのようにしてのみ、Seynが見知らぬものとなり、最後の神の立ち寄りの静けさとなる。」(Beiträge zur Philosophie, S.406)

「拒絶は贈りの最高の爵位」という陳述は普通の思考では全く不合理であるだろう。ある人がある女性に思いを寄せているとしよう。彼女が彼を拒絶することは彼にとって最高のプレゼントとなるというのは彼女の意地悪でしかないであろう。それとも？しかし、この「それとも？」がハイデガーの哲学が営まれているある「場面」では全く当然なこととして成立しているのである。「拒絶すること」が最大至高のプレゼントにして恵みとなっているところ、そこでは「隠れること」が隠れることとして起きているのであり、これが「Seynの真理」と言われていることであり、このようなことが「起こること」がEreignisなのである。このようにして、「拒絶」が「贈り」であるような「場面」は余りにも、人間の普通の世界からは「見知らぬこと」ではあるが、ここで初めて、「最後の神」が立ち寄ることのできる「静けさ」が「確保」さ

れるのである。それ故、「拒絶」こそがなにかある極限的なことを告げる言葉になっているのである。ところで、「間接伝達」とは「伝えない伝え」、いいかえれば、「拒絶」にしてしかも「送ること」である。絶対に伝えない、つまり、「拒絶」であるが、しかし、このことによって最高のものが「伝えられる」、つまり、「贈られる」のである。もちろん、ハイデガーの境位は「土曜日」の時になっていたのであるから、「贈り」と「送り」との違いがあるのは必然であるのではあるが。

さて、我々の「間接伝達論的論理学」にとって注目すべきもうひとつのことは「熟すこと」(Reife)と「最後」との連関がハイデガーによって言及されているという点である。

「合図(Wink)のこのようなWesungの中でSeynそのものがその熟しへと来たる。熟すことは果実となり、恵み贈ることとなることの準備である。ここで最後のもの、つまり、始まりより要求されていて、その始まりには告げられていない終わりが起こる。ここでSeynの最内奥の有限性が露呈される。最後の神の合図の中で。」(Beiträge zur Philosophie, S.410)

この発言はある重大なことを示唆している。それはEreignisには「熟す」ということが本質的に起こり、「果実」にあたることがこの「後に」控えているということなのである。「果実」はこの境位では「まだ来ない」ものであって、それこそが我々の「間接伝達論的論理学」、すなわち、「日曜日」なのである。なぜなら、「始めに言葉があった」が「果実」なのであるから。「土曜日」では「拒絶する贈り」であったことは「日曜日」では「伝えない伝え」となるに及んで最も大きな恵みが「送られる」のである。しかし、このようなことは宗教の事柄ではなく、「論理学」の本質に属しているということは注意しなければならない。主語―述語関係の根源の出来事なのである。読者にお願いしたいことは今述べ

たことからすぐにハイデガーの哲学や我々の論理学をキリスト教的に理解する方向に赴かないでほしいということである。しかし、我々はキリスト教に批判的な態度をとっているでもない。我々が言いたいのは事柄があくまで「論理学」の事柄であるということなのである。そのような「論理学」の根源に「熟し」と名づけられること、そして、「最後の神」が起こっているのである。

「論理学」の起源的領域で「熟す」と呼ばれることがなぜ起こるのか、という問いの答えは後に明らかにされるであろう。そして、その事態がどれほど「見知らぬこと」であり、奇妙なことか、このことをハイデガーとそして「間接伝達論的論理学」のみが知っているのである。言葉の起源と時間の本質との合流するこの

「場面」は余りにも「妙」なものなのである。ハイデガーはこのようなことを *Befremdung* と名づけているのであり、まことに事態に即した言い方になっている。それはハイデガーが言うように実に「魅惑的」な眺めになっている。

さて、「最後の神」についてのハイデガーの発言は極めて控えめなものになっているのであるから、我々もこれ以上の追求を控えなければならない。しかし、それが「循環」の問題と不離な関係にあること、このことは「土曜日」の場面がより一層規定された段階でもういちど十分な論究がなされるべきであろう。課題を残してこの注を終えることとする。

(続く)